

## コンピュータと私の長いつきあい

せたな町立若松小学校 佐々木 朗

私がコンピュータに初めて出会ったのは、大学に入って間もなくの頃で、早いものでもう 30 年も前のことになる。私の専攻は教育心理学で、実験のあとのデータ処理は、電卓を使っていた。「何とかもっと楽にできないものか。」とのことで、統計処理にコンピュータを使おうとしたのが始まりである。BASIC、マシン語を勉強し、コンピュータのプログラミングにひたすら力を注いでいた大学の 4 年間であった。

教職について数年経ったあたりから、社会では先進校で学校にコンピュータが入り始めた。私も縁あってそのような学校に勤め、教材の開発、全道からの視察の受け入れ、管内での研究発表などを行っていった。無我夢中ながら充実していた日高での 20 代の 8 年間であった。

渡島に転勤になり、すぐさま渡島情報教育研究会の設立に向けて、仲間と共に奔走し、平成 4 年に会を発足させることができた。2 年間の副幹事長、そしてその後 6 年間幹事長を務めた。校務での利用も高まり、中学校の技術家庭で選択分野になり、また、小学校でも児童をパソコンにふれさせる時代となった。「パソコンは授業にはなじまない。」という学校現場の根強い保守的な考えがある中、研究会の事業として、授業公開、教職員を対象にしたパソコン講習会、専門性を高める合宿研修などを行ってきた。また、道立教育研究所に集った仲間と共に、北海道情報教育連絡会（以後発展的に解散）を立ち上げ、全道レベルでの研究も進めた。やっぱり夢中で走っていた渡島での 30 代であった。

40 歳を過ぎて、ふと周りを見回すと、各学校にパソコンが当たり前のように入り、ワープロ専用機はいつしか職員室から消えていた。情報機器も学習指導要領に掲げられるようになり児童・生徒の利用も日常のこととなった。その一方、コンピュータネットワークが発展することによって、児童・生徒の出会い系サイトへのアクセス、ネット上の友人間のトラブルをはじめとする情報社会の負の部分がクローズアップされる時代を迎えた。これまで「パソコンをどんどん使っていこう。」という私がやってきたことを見直していかなければならない時期を迎えた感があった。

「もう一度この分野を学び直そう。」と考え、大学の門をたたき、大学院では、情報モラルについて研究を深めた。授業公開、PTA 研修会などでも情報モラルの大切さを啓発してきた。マシンも BASIC、MS-DOS から始まって XP からビスタ、そして 7 へ移行していく中、「そろそろ、時代についていくのは限界かな。」と思いながらも、パソコン雑誌を読みあさり、また、エクセルのマクロに挑戦するなど、まだまだコンピュータ利用の第一線でいたいと思う 40 代である。

校務を楽にするためにコンピュータは使われる。その分本来の仕事である子どもと向き合う時間に使えばいい。そんな中、どうやったら校務が楽になるか、どうやったら授業に効果的に使えるかなど、いつも考えている自分がある。「コンピュータに出会わなかったらどんな教員になっていただろう。」と思いながらも日々忙しくしている自分ではあるが、この分野は私の天職であると思って、今年突入する 50 代においても、教育の情報化の発展に努めていきたい。